

### 【短報】ハイマツマキムシモドキを奥秩父で採集

埼玉県の奥秩父でフライトインターセプショントラップを用いた採集を実施した際、見慣れぬ甲虫を採集した筆者は、これが自身でどうにも同定できない代物であったため、甲虫類全般に広く見識をお持ちである神奈川県平野幸彦氏に標本画像を送って確認していただいた。平野氏によれば、マキムシモドキ科の種で、日本から未記録の属であるとのことであった。インターネットで調べてみると、北米などから同様の仲間が知られていることが確認できたが、結局埼玉の個体については正体を確かめる術もなくそのまま放置することとなった。ところが最近になり、初宿ら(2012)によりこの仲間が紹介され、日本からやっと記録されたことを知った。初宿ら(2012)を基に早速同定してみると、前胸側縁に広い平圧部があることや、上翅上面が平坦で凹みがないことなどから、日本産3種のうちのハイマツマキムシモドキと同定できた。この種は頭部の複眼後方付近に単眼を備えるとのことである

が、標本の状態が頭を持ち上げてあったため、この単眼は観察できない状態であった。この「単眼」については、初宿ら(2012)に掲載された写真を見ても、どこが単眼なのか明確には分らないが、もともとこの虫自体が体長3mmに満たない非常に小さな種で



図1. 埼玉県十文字峠産ハイマツマキムシモドキ.

あり、高倍率の実態顕微鏡をもってしても頭部の表面の観察は困難であることから考えて、簡易な同定には不向きな形質であると考えられる。

また、これまで知られる本種の分布は、青森の八甲田山のハイマツ帯と、静岡県南アルプス光岳(標高2,540 m)の2箇所であり、今回の記録はこの間に位置するものである。ハイマツの自生地は国内でも高標高地に限定され、その多くは隔離状態にあるが、採集地である十文字峠付近にはハイマツがわずかながら自生しており、さらに国立公園の特別保護地域にも指定されている、より標高の高い甲武信ヶ岳(標高2,475 m)周辺にはハイマツの群落もあることから、これらのハイマツには本種の寄主であるキタマツカサアブラムシが生息していることが容易に想像できるので、本種の生息条件としては十分であると考えられる。

採集データを以下に記す。

ハイマツマキムシモドキ *Laricobius kovalevi* Nikitsky, 1992

lex., 埼玉県秩父市十文字峠付近(標高2,020 m) 11-18. VI. 2006, 筆者採集(フライトインターセプショントラップによる), 保管(図1).

末筆ではあるが、本種の同定に際して有用な情報をご教示頂いた小田原市の平野幸彦氏に厚く御礼申し上げます。

### 引用文献

初宿成彦, M. E. Montgomery & R. A. B. Leschen, 2012. 2011年に日本から記録された *Laricobius* 属3種について(マキムシモドキ科). さやばねニューシリーズ, (5): 11-15.

(新井浩二 355-0216 比企郡嵐山町むさし台 3-22-13)

### 【短報】アトキリゴミムシ類の生態に関する覚書きはじめに

アトキリゴミムシ類には特殊な生態や食性を示す種類がいくつか知られており、大変に興味深いグループであるが、そのほとんどは明らかになっていない。また、その特殊な生態に起因するためか、なかなか得難い種類がいくつか含まれている。たとえば、ヌバタマノクロアトキリゴミムシ *Setolebia nubatama* やアリスアトキリゴミムシ *Lachnoderma asperum* などはその好例だろう。前者はヤマトヨダンハムシ *Paropsides duodecimpustulata* の狭食性捕食者であることが示唆され(松本ほか, 1996)、また後者はケアリ類 *Lasius* spp. との不思議な関係事例が報告されている(森, 1997; 豊田, 2000, 森; 2006)。

筆者らは比較的記録の少ない2種のアトキリゴミムシ類について、まとまった個体数を採集・観察する機会に恵まれた。食性等に係わる重要な生態観察には至っていないが、今後の生態解明に資することを期待し、採集経験・観察状況について少し詳しく報告しておきたい。文中、種名末の～ゴミムシまたは～アトキリゴミムシをしばしば省略する。

クロサヒラタアトキリゴミムシ *Parena (Parena) kurosai* Habu, 1967

本種は東京都高尾山付近の標本をもとに記載された比較的大型のアトキリゴミムシで、本州・九州に分布するが一般には希な種類である。これまでに公表された記録の多くは単体の採集記録であ